

九（承前）

「今日は、ちよつと旦那様と出かけるからお留守番、お願いね」

朝食が終った後、彰子が雅美に言った。

朝日が差し込む朝食のテーブルには宗方の姿はない。彼は日頃滅多に朝食を取る事がなく、たいていの場合十時近くまで眠り、そして教鞭をとるために大学に出かけて行くのだ。それは彼ほどの地位を獲得したからこそ得られる特権であった。

雅美はその彰子の言葉に肯く。

「はい、奥様」

「あつ、それと今日はとつても遅くなるから夕食の用意はいいわ、いつものお部屋のお掃除が終ったら、ゆつくりしてちょうだいね」

「はい、ありがとうございます」

雅美が微笑み、朝食の後片付の為に椅子から立ち上がった。

昼下り。

雅美は与えられた自分の部屋にいた。今朝の言葉通りに彰子は宗方と共に出かけっており屋敷は静まりかえっている。

日課としている様々な用件も一段落つけ、午後のもの憂げな時間に浸っていた雅美の耳に、窓の外から猫の鳴声が聞えた。

ふと窓の外を見ると、目の下の一階の屋根から一匹の猫がこちらに瞳を向けていた。

その猫は美しい黒猫であった。毛並はあくまでも純粹の黒であり、しなやかな筋肉を秘めた細身の身体は、猫は本来野を駆ける肉食獣の系統である事を改めて思い出させる程に整っている。

そしてその瞳は黒色の顔の中で白銀の輝きを放ち、まっすぐに彼女の目を見返していた。

雅美は、暖かな陽の光に照らされているのにもかかわらず、一瞬、身体にぞくりとするような寒気を覚えた。

その一瞬にまるで魅入られてしまったかのように黒猫から目を離す事が出来なくなった彼女は窓を開ける。

猫が軽々と飛び、まるでそうされる事が当然であるかのように、部屋に入りこんで来た。

雅美は窓に背を向ける。絨毯の上には黒猫が立ち、彼女はその猫を見詰めながら後ろ手に窓を閉じる。

黒猫が鳴声を上げた。

後に宗方によって、エンプーサと名付けられる事になる黒猫と彼女との出会いであった。

雅美は椅子に座って腕の中に黒猫を抱き、そのビロードのような毛並を撫ぜる。

猫は彼女にそうされる事を楽しむように目を閉じ、その頭を二の腕にあずけている。

ふと、彼女の猫の毛皮を撫ぜる手が止った。

部屋の中が急に蒸暑いような感覚に捕われ、窓の外の昼下りの太陽が射す景色が突然、色褪せたように思えた。

彼女は意識しない内に太股を寄り合わせる。鈍い圧迫が股間にかかり、つい先程までとは違った目で自分の部屋を見回す。

ベッドの上で視線が止る。

夜の、そのベッドの上で自分が味わった自慰の快樂が蘇り、想像の聴覚がその時の隣の夫婦の寝室からの声を聞く。

雅美は怖れにも似た感情をいだき、胸の鼓動が早まるのを意識する。そして今、屋敷の中には自分以外の誰もいないのだという事を考える。

黒猫が彼女の変化を敏感に感じ取ったのか、閉じていた目を開け、頭を持ち上げる。

彼女が再び腕の中の黒猫の瞳を見詰める。

黒猫が軽く飛び、床に下り立ったとき、雅美が立ち上がった。

雅美は、隣の宗方と彰子の寝室のドアの前に立つ。

心の内からの声に逆らうようにドアのノブに手をかけ、開く。その時、心臓の鼓動が自分でも聞える程に高まり、息がそれに呼応し早まった。

雅美は寝室に入り、ドアを閉じる。その音と自分の胸の奥から聞こえる心臓の鼓動は、この刺激的で蠢惑に満ちた冒険への序曲であった。

彼女は困難な仕事を終えた者のように、一つ深い溜め息を漏らし、寝室を見回す。

部屋の窓は閉じられていた。

彼女はこの寝室にこもる雰囲気という「匂い」を嗅ぎ取ったように思い、喉を鳴らす。目が、わずかにに乱れているベッドに引き付けられる。そして毎夜のように、あのベッドの上で繰広げ

られているであろう、宗方と彰子の痴態を思う。

彰子の上げる切ない声、快樂の声、すすり泣きの声。宗方に秘部ばかりか後孔までを舐られ、身悶えする彰子の姿態。勃起した陰茎を舐めしゃぶる彰子、手錠で両の腕を拘束され、濡れた秘部と尻を晒け出す彰子。その彰子の尻に向けて鞭を振るいつづける宗方。傷ついたの尻を押し広げ、その中心部に陰茎を押し付けて騷りつくす宗方。宗方の激しく前後に揺れる腰。汗に濡れる身体。射精の時の声。

その全ての光景が雅美に襲いかかる。

雅美は数歩あゆみ、ベッドの近くの床に膝をつく。微かに残った彰子のものであろう薔薇の石鹸の匂いが香った。

手がスカートの中に伸び、下着の上から秘部を愛撫しはじめ。

息が荒れ、焦点を無くした瞳が、ベッドの上での彰子と宗方の痴態を再度思い浮べる。膝が床の上を左右にすべり、股間の手の動きを助けるように左右に開いた。

その彼女の膝に何かが触れた。

それはベッドの下からわずかにはみ出していた、取っ手の付いた革性の箱だった。

雅美が身体を屈め、その箱をベッドの下から引き出す。

まさか……？

彼女のその箱を見詰める瞳に怖れと期待の感情が過ぎる。

細かく震える、先程まで秘部をまさぐっていた手が留金を外し、蓋を開けた。

その中には彼女の想像通り、鞭をはじめとする様々な責め具、秘具が収められていた。彼女の視線が、箱の中の二組の手錠に引き付けられる。鈍く銀色に輝く、その手錠を彼女は取り上げ、見詰める。

この手錠を詰められて奥様は旦那様に舐られているんだ……お尻を鞭打たれているんだ……旦那様のものを口に含み、舐め、そして……。

両手の自由を奪われて、旦那様を受け入れる時はどんな感じがするのだろうか？ 本当に奥様が毎夜上げられているような、喜びの声を出してしまう程に気持ちがいいものなのだろうか？ 私もそうされたら、あんな奥様のような声を上げるのだろうか？

雅美は箱の中の鞭を取る。

その鞭はぞくりとする程に細く固く、そして鋭かった。彼女は、自分がその鞭を尻に受ける事を想像する。

きつと泣声を上げてしまう程に痛く、辛いだろう……。お尻くみみず腫れになって、血を流すかも知れない……。何故奥様はそんな仕打ちをまるで楽しむかのように受け入れる事が出来るのだろうか？

ふと彼女は、みみず腫れが走り、血を流している自分の尻を思い浮べる。そしてその途端に、

股間の秘部の奥底に疼くような感触が生じた。

彼女は、まるで赤く熱せられた鉄の棒を、うっかり握ってしまった時のように慌てて鞭を放す。床に転がったそれを改めて見たとき、彼女は少しだけ、鞭を尻に受ける事を楽しむ彰子の気持ちに理解出来たかのように思えた。

次に彼女はその箱の中から、長い縫針が収められた筒を取り出した。

それは鞭以上に彼女の心に突き刺さった。

針……。この中に収められている針……。旦那様はこの針を奥様の身体に刺すんだ……。いたい……。いったい何処に？

雅美は縫針を筒の中にしまいこみ、最後まで手を触れる事を躊躇していた、陰茎を象った木製の張り型を取り上げる。

それは彼女には、絶対に受け入れる事が出来ないだろうと思われる程に、大きく恐ろしげに見えた。

しかしその手は、張り型のなめらかに研き上げられた表面を撫でさすり、手触りを楽しむ。そして彼女は、この張り型を秘部にねじりこまれる時の彰子の事を思う。

汗でびっしりと濡れ、鞭を受けてみみず腫れが走る尻の狭間に張り型を押しこまれる彰子の姿が、まるで目前の光景のように浮ぶ。そしてその彰子の表情は、快楽を貪る者のそれであった。

雅美は、身体が汗ばむ程の欲情を覚え、両手に握った張り型が幾度となく吸っているだろう彰子の汗と愛液を思い、その欲情を更に深める。

熱い息が唇からもれ出す。

雅美は、箱の隅に小さな鍵が置いてある事を確かめてから、手錠を自分の両手首に掛ける。

軽い金属音とともに、重く、冷たい感触が手首に触れ、そして彼女はその不自由な手に張り型を掴む。

彼女は、欲情で濁った瞳でベッドを見詰め、そのベッドの上で毎夜繰広げられている彰子と宗方の痴態を想像しながら、床に付いた膝を更に大きく開き、股間に、手に持った張り型の亀頭の部分を押し当てる。

中断されていた快樂の波が彼女を包み込み、下着の上から秘部に触れる張り型が、二重になった布を通してさえ滲む愛液でわずかに濡れる。

雅美は両手で持った張り型を左右に振るようにして、固くなめらかな器具で快樂の箇所を擦り上げる。下着を、その奥からぼつりと持ち上げている陰核の突起に、亀頭を押し付けて捻るように回す。両手に詰められた手錠を繋ぐ鎖が、金属音を立て、その音と同調するように彼女が荒い息を吐く。

雅美は、自分の秘部から滲んだ愛液が張り型に染み込み、既にそこにあるだろう彰子の愛液と混ざり合っているだろうことを思い、快樂のすすり泣く声を上げはじめ。

昼下りの日光が差し込む寝室に、張り型を自分の股間に当て、半ば本能的に腕と腰を揺すり、自慰に没頭する雅美の、淫らに半開きとなった唇から漏れたす快樂の声と息遣いが満ちはじめ。雅美がひととき大きく身体を震わせ、絶頂に達する。

自ら填めた手錠に拘束された両手から、彰子の愛液と、雅美の愛液を吸った張り型が床の上に転がった。

物憂げに彼女は頭を垂れ、絶頂の余韻を溜め息として吐出す。このまま床に身を横たえ、眠ってしまいたいと言う誘惑に襲われるが、勿論そんな事は出来るはずもない。

彼女はのろのろと手錠に繋がれた手で、箱の中の先程確認した小さな鍵を取る。右手で左手首に填まった手錠の鍵穴に鍵を差し込み、回す。

そして次の瞬間、彼女は身が冷えるような驚愕を覚える。

鍵が合わない……。

その純粋な恐怖は、彼女の背筋に氷柱を生じさせ、慌てさせる。

彼女は懸命に鍵穴に差し込んだ鍵を回しつづける。もしやと思い右の手錠の鍵穴にも試して見るが、やはり鍵は合わない。

雅美の身体から、快樂の余韻が消え去る。

不自由な手で秘具が収められた箱を探り、他の鍵を探す。鍵は無い。

彼女は頭から血が引いていく時の感覚を覚え、床に座り込む。

どうしよう、どうしよう、どうしよう……。

両手が、無駄とは知りつつも手錠から逃れようと左右に引かれる。頑丈な金属の鎖はそんな彼女の抵抗をあざ笑うかのように、ただ甲高い金属音を鳴らすのみであった。



カチャリと音を立てて宗方が、彰子とともに入ったカフェのテーブルの上に、小さな鍵を置いた。

女給が運んできた紅茶のカップ越しに、彰子はその鍵に視線を向ける。手が止り、テーブルの上に口を付けないままのカップを置く。

「その鍵は……」

宗方が彰子に微笑を向ける。

「そうだよ、手錠の鍵だ。君の好きなね」

「好きだなんて……そんな……」——「でも、何故そんなものを持っていらっしやるの？」

彰子が、辺りをはばかりのような低い声で問いかける。

「箱の中から持って来たんだ」

「だから……何故？」

彰子の声が半ばで止る、そしてある事に気付き、驚きの表情を浮べる。

「貴方……まさか、今日のお出かけは……」

宗方の微笑みが深くなる。

「そう。今日の外出はただの口実だ、雅美を一人にする為のね……。私達の夜の声を聞ききながら自慰をする娘が、一人になったら何をするとと思う？ それに今日は遅くなると言っているのだらう……」

「でもそんな、でもそんな事、貴方の勝手な想像だわ」

しかしその彰子の声は、どこか自信無げであった。

「果してそうかな？ あの箱の蓋に今朝私は髪の毛を一本挟んでおいたんだ、誰かが開ければすぐにわかるようにね」

彰子は、口を付けていない紅茶のカップを下目使いに見詰め、思いに耽る。そして、そんな彼女を急かすかのように、宗方が立ち上がった。

「さあ、そろそろ頃合だろう、屋敷に戻るとしようか……」



無駄とは知りながら幾度も抵抗をくり返した後の疲れきった身体を、雅美が寝室の床に横たえる。

私は罨にかかった森の鹿なんだ……。すぐに猟師か獣があらわれ、私の身体は引き裂かれ、食い千切られてしまうんだ……。

彼女の両手首には抵抗を繰り返すうちに手錠と擦れた、薄い擦過傷が無数に走っていた。

罰が当たったのよ……。旦那様と奥様の寝室に入り込み、淫らな行為をした事の罰が当たったんだわ。

そして彼女は改めて、自分が夫婦の寝室でおこなった淫らな行為を、宗方に知られてしまったらどんな罰を受けるかという事に思いをはせる。

それはあまりに恐ろしい考えであった。

一階から玄関のドアが開く音がし、つづいて、宗方と彰子の話す声が雅美の耳にとどいた。

雅美は、床から跳ね上るようにして身を起す。

取り乱し、辺りを見回す。開けられたままの秘具の箱、転がった張り型、鞭、縫針の筒。着崩れ、めくれ上がったスカートから太股のつけ根辺りまでを大きくさらけだしている、自分の姿。

何故、何故なの、奥様は遅くなるっておっしゃってたのに。

そして彼女は、階段を上がってくる二人の足音を聞く。

慌てふためき、なんとか不自由な手でスカートだけを下ろしたその時、寢室のドアが開いた。

雅美が嗚咽の悲鳴を上げ、ドアの近くでは、後ろに彰子を従えた宗方が、愉悦の微笑を浮べた。

「私の言ったとおりだったな、彰子」

宗方が、背後から床の雅美を見詰める彰子に言った。

彼女はその言葉に答える事なく、寢室のドアを閉じる。その目には諦めた者の悲しさが漂っていた。

宗方が雅美に近寄っていく。床で目を伏せ、怖れに身体を細かく震わせていた雅美は、その気配にいつそう身体を縮める。

宗方が屈みこみ、雅美の顎に手を掛けて上を向かせる。

雅美はされるままになりながらも、視線を合すこともできずに囁く。

「ご免なさい……。許して、許して下さい……」

宗方が、哀願する彼女に薄い笑いを浮かべながら囁ように言った。

「私達の寢室で何をしていたんだい……雅美。それに手錠なんかして……」

宗方が床に転がった張り型を取り上げ、彼女の目の前に突き出す。

「これで悪戯をしていたのか……」

「いや……」

雅美が小さく呟いて、顔を背けようとする。しかし顎を掴む宗方の手がそれを許さない。

「知っているんだよ、雅美。お前が毎夜、自分の部屋のベッドで何をしているかをね。私達の声聞きながら、自分を慰めている事をね……。この寢室の声が、お前の部屋で聞えるように、こちらの声も聞えるんだよ……」

雅美が声もあげることができずに、驚きの顔を上げる。

「もう一つ教えてあげよう、その手錠の鍵はわざと私が持って出たんだ、偽の鍵を置いてね」

雅美が何かを言おうとした時、宗方が彼女の顎から手を離し、乳房を掴む。

「うう……」

ゆつくりと揉まれはじめたとき、ようやく雅美は、手錠によって両手の自由を奪われている身体をひねり、宗方のその手から逃げようとした。

だが、そんな彼女の抵抗は、ただ宗方を楽しませるだけであった。

「もう、一人で自分を慰める事はないんだよ、今日からはね……」

そう囁く宗方の目は欲情に滾っており、その視線を受けた雅美が、低く泣き声を漏らしはじめる。

宗方の手が、雅美の腰のスカートを止めているボタンを外し、一気に脚から抜き取る。その動

きがあまりに早かった為に、彼女は抵抗する事も出来ずに、ただ小さい驚きの悲鳴を上げたただけであった。

白い下穿きを着けただけの下半身を精一杯にすぼめ、雅美が哀願の声を上げる。

宗方が囁く。

「恐がる事はない、楽しい事だよ。お前も夜ごと彰子の上げる喜びの声を聞いているだろう、楽しませてあげるよ、十二分に……」。

宗方が抵抗する雅美を抱かかえ、ベッドの上に放り上げる。

「まずは、悪戯の後始末がちゃんとできているか調べてやるとするか」

その宗方の言葉に雅美が、自慰により汚れているだろう自分の秘部を思い、恥辱の恐怖に首を振る。

「いや……そんな事なさらないで」

宗方は、靴下に包まれた雅美の両方の足首を掴み、その抵抗を押し分けるようにして左右に開いて行く。

雅美が、細い絶望の悲鳴を漏らす。

大きく割り開かれた下肢と股間が作りだす台形の、白い下穿きの布に包まれた頂点に、宗方は食い入るような視線を注ぐ。そこには雅美の自覚どおりに、自慰の名残である薄い染みがあった。

「随分楽しんだようだな……」

宗方が、更に顔を股間に近づけていく。

「女の香りまでが漂ってくる……」

「いやあ！」

雅美が恥辱の悲鳴を上げ、精一杯に脚をすぼめる。その脚が宗方の手をすり抜け、彼の頬を強く打った。

宗方が低くうめいて身体を起こす。そして雅美は、予想していなかったとは言え、主人の顔を打ってしまったことに後悔の声を上げた。

しかし宗方は、打たれた頬に手をやりながらも、薄笑いを崩してはいなかった。

「彰子」

宗方が、背後で見守っていた彰子を呼ぶ。

「はい」

答えた彼女の声にはどこか虚ろさがあった。

「下に行って紐を持って来てくれ。どうやらこの娘、縛り上げられたらしい。そう、それと湯とタオル、はさみもいるな」

宗方の背中に、一瞬だけ彼女の躊躇する気配が伝わってきたが、すぐに彼女は小さくうなずきを返し、ドアを出ていく。その際、彼女がちらりと雅美に視線を向ける。

雅美の哀願の瞳が彼女を見返すが、彰子の視線はなにも語ることなく逸らされた。

宗方は彰子を待つ間に、辺りに散らばった陰具を見せ付けるかのようにベッドの上の雅美の近くに並べ、脅える彼女の表情を楽しむ。

しばらくたった時、階段を昇る足音につづいて彰子が、湯を張った洗面器と白いタオル、そして真っ赤な紐とはさみを持って寝室に入ってくる。

宗方が紐を受け取り、彼女に命じる。

「手伝ってくれ」

彰子が肯き、ベッドの上で脅える雅美に瞳を向ける。

「ごめんね、雅美ちゃん、でもこうなっちゃったのも……あなたが……」

彼女はその後の言葉を飲み込み、宗方とともに雅美に近か付いていく。

哀願の声を上げ、精一杯に抵抗する雅美を、宗方と彰子はベッドの上に押えつけ、膝の関節に紐を挟み込みこんでから、その脚を折りたたむようにして足首と太股の付根を縛り付ける。そして更に膝の関節に挟んだ紐を背中に回し、両方の紐を力一杯に引きしぼり、結び付ける。

作業を終えた宗方が、ベッドから一步下がって雅美の、正座の時のように折り曲げた脚を大きく開かれた格好で縛り上げられ、手錠により両手を拘束されたその姿をじつくりと眺める。

「さあ、お楽しみのはじまりだ」

宗方が、雅美の開かれた脚の間に屈み込む。

雅美が瞳をかたく閉じ、目頭から押し出された涙が頬に流れる。そして宗方の指が下穿きの上から秘部をまさぐりだすと、懸命に閉じようとする太股の、紐で締め付けられた個所が白くなり、ぴくりと震えた。

宗方の指が、彼女の秘部を下穿きの上から、その奥の輪郭をなぞるようにして這う。

股間が開かれている為に、彼女が薄い布の奥に秘めている繊細な襞の形がはっきりと指に伝わってくる。その襞の頂点に指がぼつりとした小さな突起を探り当てた。

雅美がその感触に小さな声を上げ、唇を噛む。

彼女の反応に宗方が、突起に指の腹を軽く押し当て、くすぐるように指先を細かく動かす。

雅美の身体に鈍い快楽が生じ、彼女を責めたてる。小鼻が膨らみ、目蓋が更に固く閉じられた。

宗方が指を止める事なく、そんな彼女を眺めながら囁く。

「どうだ、自分でするのとどっちがいい？」

雅美が首を振り、宗方がからかうような調子の言葉をつづける。

「ここに触れた事がない娘は、ここに触れられると痛みがある事もあるそうだ……でもお前にはそんな心配は無用のようだな。ずいぶんと一人で楽しんでいるらしいな」

「……そんな……そんな事、おっしゃらないで……」

自慰の時よりも幾倍にも感じる快感。そのなかで雅美は、自分が次第に崩れていってしまいうような感じを味わっていた。そして恐ろしい事にそれは、決して不快なものではなく、なぜか心地よささえ感じられるものだったのだ。

宗方の指が下穿きの布をとおして、愛液の湿り気を感じ取る。中指が下穿きの上でぼつりと頭をもたげた突起を押し、親指が柔らかな秘部に触れ、その肉をこね回しはじめる。

「ほら、どうだ。こうして強くされるのがいいんだろ、痛いぐらいがお前は好きなんだろ、いたぶって欲しいのだろう」

「あぁっ……」

雅美が、はつきりとした快楽の息遣いでその言葉に答える。

宗方の指が、布の下の突起が更に固くなるのを感じ取り、女の匂いが辺りに漂った。

雅美が唇をかみ締めていた顔を上げ、耐えつづけていた喘ぎ声を一声あげた時、宗方ははさみを取り、彼女の秘部を覆っている下穿きの腰の部分に刃を当てる。

肌に触れる冷たい金属の感触。雅美が最後の哀願の言葉を漏らす。

「ゆるして下さい……」

だがその言葉は、あまりにもか細かった。

宗方が、下穿きを切られ、その奥に秘めた女の箇所を初めて男の目に晒される瞬間の雅美の表情を見詰めながら、鉗を持った手を引き絞った。

腰の部分を取り取られた後も、下穿きは雅美の漏らした愛液で秘部に張り付いていた。宗方がその布を掴み、腰から奪い取る。その瞬間、彼女は絶望の声を上げ、脚を反射的に閉じようとする。

紐が軋みを上げ、強制的に開かれている白い太股に赤い線が引かれた。

宗方は、雅美の膝に両手を掛け、更に大きく股を割り開き、さらけ出された処女の秘部に視線を向ける。

翳るような飾り毛に囲まれた肉色の壁がわずかに左右に開いて、愛液に濡れ光る内側の桜色をした箇所が、彼の目を射る。

まだ開花する事に慣らされていないその蕾に、宗方が指をかけ、その奥を残酷なほどに剥き出しにする。

内側の肉壁が寄り合うところで形をきわ立たせる陰核、ほつりとした尿道口とぴっしりとした筋肉によって固く閉じた膣口。そしてその奥から香るのは、男を昂ぶらせずにはおかない女の匂い。

秘密の全てを覗き込まれる雅美は、時折しゃくりあげるような切れ切れの息を吐きながら、溜めた瞳をただ虚空に向けている。

宗方が彼女の股間を覗きこんだまま、後ろの彰子に言う。

「濡らしたタオルをくれ、悪戯の後始末が出来ていないようだ」
ひくりと、そんな言葉を聞いた雅美の身体が震えた。

彰子が湯で濡らしたタオルを宗方にわたした。受け取った彼は、片手で雅美の秘部を押し開いたまま、ほのかに暖かいタオルで愛液の残滓を拭いとおいていく。

それは既に、はつきりとした愛撫の手付きであった。まだ薄く繊細な襪の隙間に細く絞った布地を合わせ、尿道口と膣口を拭う、敏感な突起はその包皮の隙間までを念入り清められ、艶々とした瑠璃色が窓からの陽に際立つ。

身体の奥底を覗き込まれ、その汚れをもさらけ出した雅美は、既に抵抗する気力もなくしたのか、顔をうつむかせ、時折敏感な箇所タオルが触れる時だけぴくりと太股を震わせるだけであった。

宗方が、愛液で汚れたタオルを彰子に返し、雅美の頬に手を触れる。

諦めと言うよりかは、どこかぼんやりとした表情で彼女が宗方を見返したとき、彼がその唇を奪う。一瞬彼女は驚きの表情を浮べるが、彼の舌先が唇を割ると再び目が閉じられた。

宗方は彼女の舌に自分の舌を絡みつかせ、その感触を充分に味あわせるまで、長い口付をつづけた。

宗方が、抵抗の気が失せた雅美の服のボタンを外し、両方の乳房を剥き出しにする。

彼女の双つの小ぶりの膨らみの上では、まだ他人に触れられたことのない乳首が、ようやくその存在を誇示するほど微かに起立していた。

宗方は片方の乳首を指でつまみ上げ、も一方の乳首を口に含む。舌先でその先端をくすぐるように愛撫し、調子を合せてもう片方の乳首を柔らかく愛撫する。そうされるうちに、彼女はすすり上げるような、快樂の息が混じりこんだ声を上げはじめた。

宗方が軽く歯を、すつかり固くなったそれに当て、柔らかく噛んでから、顔を離す。再び、頬に手を掛け唇を奪うと、雅美はその口付に答えようとでもするかのように、顎をわずかに傾けた。宗方が指で乳首を愛撫しながら二度目の彼女の唇を味わう。

口付けを終えた宗方が、手を彼女の太股に掛け、紐によって開かれている股間に顔を近づけていく。

股間の飾り毛が彼の吐く息に揺れたとき、雅美はようやく自分がされようとしている事に気づき、腰を引いた。

「いや、そんなこと……なさらないで……」

しかしその言葉も、宗方の唇が秘部に触れた途端に小さな悲鳴となって消えた。

伸ばされた舌先が敏感な粘膜をすべり、舐め上げていく。

宗方の舌は繊細な肉壁をめくり、奥に隠れた陰核を露出させ、愛撫する。その快樂によってほぐれだした膣口から、透明な滴りが滲み出し、彼の舌がそれをからめとっていく。

雅美が喘ぎの声を漏らす。

秘部で味わう宗方の舌の動きは、切なくなるような快楽となり、腰の中心から、心臓の鼓動に合せるように快楽の波が生じる。その波に身をまかせながら、彼女はどこか、もどかしげな気分

に捕われ、もっと強い快楽を欲している自分を発見する。
そして彼女は、夜のベッドの中で自分を慰めている時ならば、すぐさま味わう事が出来る、その強い快楽を求め、涙を流す。

もっともっと強く……、もっとと激しくして……。

しかしその願いは叶えられないこともなく、宗方は執拗に愛撫を繰り返す。

雅美が、自分でも意識しない内に腰を浮かせ、彼の顔に股間を押し付ける。

女の反応を知り尽している宗方が、彼女の気持ちを逸らかすように、すっと顔を秘部から離れた。

中断された愛撫に雅美が落胆の声を上げる。

そんな彼女の前で、宗方がベッドの上に膝を付き、下ろしたスポンから淫茎を取り出した。

雅美が、その初めて目にする勃起しきった男の剛直を見詰める。

テラテラと輝き、笠を大きく開いた肉の塊。それはある意味では恐ろしく狂暴で、だがあるときは彼女の心の奥に秘められた妖しい衝動を呼び覚ますものだった。

「……」

微かな男の異臭が漂い、雅美はその匂いを感じたとき、浅く息を漏らした。

「さあ、今度はお前が味わうといい」

言葉とともに、目前に宗方の淫茎が目前に突きつけられる。

「だめ……できない……」

弱々しげに囁く雅美の頭に、宗方の手がかかり、そして引き寄せる。

「早く……」

宗方の掠れた声。その声を聞いたとき彼女は、彼もまた昂ぶり、そして自分が欲されているのだということに気づく。それはどこか不思議な事のようにだった。その瞬間まで、彼女にとって宗方は、かけ離れた世界の人であった。単に自分より上の階級の人であると言うだけではなく、その属する世界自体が違うのだと。

だがそんな宗方が自分に欲情し、そして自分を求めている。

雅美は、上目使いに宗方の顔を見上げ、そして自分を見下ろしている彼の目を見て、微かに肯いた。

雅美は瞳を閉じ、宗方の陰茎を小さく開いた唇に受け入れていく。

宗方が、そんな彼女の頭をゆっくりと撫ぜる。

淫茎を半ばまで口に収めたとき、彼女の動きが止まった。問い掛けるように向けられた雅美の

視線に宗方が答える。

「啞えているだけじゃ駄目だ、舌で頭の部分を舐めるんだ。唇を窄めて、挟み込むようにして顔を前後に振るんだ」

その宗方に命じられた通りに、雅美が口の中の陰茎を愛撫しはじめる。

宗方の手が、ゆっくりと前後に動く雅美の頭を撫ぜ、その指に髪の毛を絡ませる。

雅美の唇の端から、一筋のよだれがこぼれ出し、ベッドのシートに小さな染みを作っていく。

「彰子……」

宗方がかすれ気味の声で背後の彰子を呼んだ。

近付いてきた彼女を宗方は片腕で抱き寄せ、そして唇を奪う。彰子はすぐにその口付と、深く差し込まれてきた舌を受け入れる。

宗方は口で彰子の唇と舌を味わい、そして下腹部で雅美の舌を味わう。二つの快楽が溶合うその中で、彼は目を閉じる。

興奮が昂ぶり、ある線を越えたとき、宗方が雅美の啞える陰茎に手を添えた。

彼は、腰を少しだけ引き、啞えさせた亀頭の部分を舐めつづける雅美の舌が生み出す快楽を感じながら、竿の部分をこすり上げる。途端に、強い、射精に繋がる快感が生じる。

宗方は彰子を更に強く抱き寄せ、その唇を強く吸い、そして手の動きを早める。

快楽が昂まり、そしてそれを感じ取った彰子が、彼に身体を密着させ、両手その髪を乱しながら舌を貪る。

宗方が強く、そして早く陰茎をこすり上げる。

今まで以上に大きく膨れ上がり、その先端の窪みから滲み出す粘液の味を感じた雅美が、その女の本能に引かれるように、舌で宗方を愛撫する。

「!!」

声というよりも、震えに似たものが宗方の身体を走り、次の瞬間、彰子が口の中で彼の射精のうめきを感じた。

宗方の下腹で雅美が咳き込む。

初めて味わう男の飛沫は、今、口にしている淫茎そのものの味わいだった。雅美はびくびくとした痙攣をその唇で受け止め、そして口の中に放たれた白濁をこぼす。

醒めていく余韻の中で、宗方は、処女の唇を犯したその行為に満喫しながら、精液と、溢れだした涙で汚れた雅美の顔を見下ろす。

雅美が、嫌でも口の中に感じてしまう白濁の異様な味わいに嗚咽し、手錠に繋がれた手を口元に持っていく、拭った。

「下につれて行って洗ってやれ、口もすすぎたいだろうしな」

宗方が、まだ腕の中に抱いたままの彰子に言った。

彰子が肯き、ベッドの上でどこか呆然としている雅美に近寄る。

「さあ、雅美ちゃん、下に行きましよう、お顔を洗って上げるわ」

雅美が涙で縁取られた顔を上げる。

彰子が雅美をベッドから下ろし、寝室を出ていこうとしたとき、宗方が声をかける。

「下に行ったら風呂に火をつけておいてくれ」

彰子が宗方に振り返る。

「お風呂、お入りになるのですか？」

「そうだ、雅美と入る」

その言葉に、雅美が伏せていた顔を上げ、宗方を見る。そして彼の瞳の中の逆らう事の出来ない表情を認め、再び顔を伏せた。その隣りで彰子が、何かを口にしかけ、止める。

無言のまま、寝室のドアを出ようとする彰子に再び、宗方が声をかける。

「手錠は外すなよ」

「はい。承知しておりますわ……」

宗方が、二人の女の出でいった後、ドアを見詰める。その瞳は、これから自分が行うであろう行為を思い、薄い笑いを浮かべていた。

以下、次回へ